

令和元年5月23日現在

機関番号：32663
研究種目：基盤研究(C) (一般)
研究期間：2015～2018
課題番号：15K02407
研究課題名(和文) 戦間期ポーランドの亡命ロシアに関する研究

研究課題名(英文) Russian Emigres in Interwar Poland

研究代表者

小椋 彩 (Ogura, Hikaru)

東洋大学・文学部・助教

研究者番号：10438997

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：研究の蓄積の浅い、戦間期ポーランドの亡命ロシアの文学活動の実態について明らかにした。とくにロシア象徴派の詩人でありながら反ポリシェビキの急先鋒としてワルシャワの亡命ロシアで中心的役割を担ったドミートリイ・フィロソフとフィロソフの結成したサークル「コロムナの家」、そのサークルに参加したロシア及びポーランドの作家たちの創作活動の実態、のちにパリに移住し亡命ポーランド系雑誌編集主幹となるユゼフ・チャプスキの活動や、亡命者たちの交流について調査し、創作への影響等について分析を加えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ロシア革命後に欧州を中心に生まれたロシア・ディアスポラに関する先行研究の多くは、パリ・ベルリン・プラハを扱っているが、ポーランドの都市について、研究はほとんど進んでいない。筆者は研究の蓄積の浅い戦間期ポーランドの亡命ロシアに着目、ワルシャワに亡命ロシア文学サークルを結成し、亡命ロシアの中心となったドミートリイ・フィロソフと、そのサークルに参加し、のちにパリに居を移して亡命ポーランド系雑誌の編集を務めた亡命ポーランド人ユゼフ・チャプスキを中心に調査を進め、ポーランドの亡命ロシア人の文化活動や、亡命ロシア人とポーランド人の交流について明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Little is known about Russian Diaspora in Poland. I investigated a rarely studied "Russian Poland" in Interwar period, paying attention to Russian &Emigré literature circle "Domek w Kolomnie" in Warsaw.

研究分野：ロシア文学、ポーランド文学

キーワード：亡命ロシア フィロソフ チャプスキ ゴモリツキ 戦間期ポーランド レーミゾフ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1920年代から30年代にかけて、亡命ロシア文化が花開いた中心都市として、ベルリン、ベオグラード、パリ、プラハ、ハルビンがよく知られる。戦後、アメリカに世界の亡命ロシアの拠点が移るまで、これらの各都市には亡命出版社が設立され、新聞・雑誌を刊行、亡命ロシアの政治的状況や文化活動を国内外にひろく喧伝した。新聞や雑誌は亡命文化にとっての中心的メディアだったが、これをおもな活動の場とした亡命ロシア作家の文学は、亡命研究のなかでも圧倒的な蓄積を誇り、アダモヴィチ、ストゥルーヴェ、ステプーン、ウェイドレなど、古くから錚々たる文学者が数多く分析の対象としている。フランス、ドイツ、ユーゴスラヴィア、チェコ、そして中国や日本における亡命ロシア文化については、したがって、これまでに十分に詳細な研究が積み重ねられており、近年は研究テーマが世界的に細分化される傾向にある。本国ロシアでも亡命文化はブームとさえ言え、例えば「パリの亡命ロシア」一つをとっても、著名な亡命作家による回想・書簡や、初公開のアーカイヴ資料を含む亡命出版社・雑誌研究など、重要な書籍の出版が相次いでいる。その一方、ワルシャワもまた、亡命ロシア文学の拠点であった。十分に多くの作家や詩人がこの街に居を構え、創作を行い、同人として文学クラブに集ったことが知られている。ところが、ワルシャワや、ポーランドの他都市の亡命ロシア文化サークルは、パリやベルリンに比して規模が小さく、それゆえにこれまでに本格的な検討の対象になっていなかった。

2. 研究の目的

本研究は、おもに戦間期パリの亡命ロシア文化の再検討、及び、ポーランドの亡命ロシア文学の特質を明らかにすることを目的とする。前者の研究の蓄積は厚いが、それにもかかわらず、アレクセイ・レーミゾフのとくに晩年の活動については、資料の散逸などの理由から、他の亡命作家らに比較して遅滞が見られる。筆者は、レーミゾフ資料のロシアのアーカイヴ調査に加えて、これまでほとんど注目されてこなかったポーランド人との交流に着目、ポーランド語による資料収集にも努めて、亡命ロシア文化研究に対する新味ある貢献を目指した。

また、亡命ロシア文化への近年の世界的関心の高さにも関わらず、ポーランドにおける亡命ロシア文学について、ポーランド、ロシアも含めた国内外に本格的な研究がきわめて少ない。個別の作家研究には一定の蓄積があるものの、ギッピウスやメレシコフスキイ、サヴィンコフ、アルツィパーシェフと言った著名な作家の、該当時期の一部の作品分析に限られ、また彼らとポーランド側の相互的影響についての分析も不十分である。両亡命文学を俯瞰的に眺めつつ、詳細に踏み込み、これまでに知られていなかった作家・作品の発掘も目指した。

3. 研究の方法

(1) 戦間期ポーランドの亡命ロシア文学の作品分析と評価の分析

(2) 受容・評価調査のため、亡命ロシア文学に関する記述をポーランド語新聞・雑誌等、同時代人の言説から収集、分析

(3) 戦間期ポーランド文学の文学的手法・傾向の分析と再定義、国内外での評価の分析

亡命ロシアとポーランド及び亡命ポーランド研究はこれまで個別に行われてきた。本研究は両者の有機的連関について明らかにするものであり、(1)から(3)を同時並行的に行った。

資料収集は主にポーランド国立図書館(ワルシャワ)、ロシア文学博物館アーカイヴ(モスクワ)、北海道大学図書館で行った。

4. 研究成果

(1) ロシア文化の意義を深く理解し、多数のロシア知識人と交際、ロシア思想や芸術を独自の創造的源泉としたポーランド知識人として、画家・評論家のユゼフ・チャプスキ(1896-1993)に関する新しい知見を得た。これまで、彼が受けたロシア文化からの影響については指摘されていたが、本研究により、一方向的影響関係ではないことが示された。仏・露・ポーランドの亡命社会を往来し、ロシア文学のポーランド語への翻訳なども行った彼は、亡命ロシア人たちにポーランド文学の講義を行うなど、両文化を架橋する役割を担っていた。

(2) 亡命ロシア人アレクセイ・レーミゾフとユゼフ・チャプスキの交流について、モスクワのアーカイヴ調査で得た新資料により明らかにした。

(3) 亡命ロシア人で、のちにポーランド語作家となったレフ・ゴモリツキの活動初期のロシア語長詩「ワルシャワ」を分析、両国語で創作した芸術家のアイデンティティ創出の軌跡を追った。

(4) ロシア象徴派詩人ドミートリイ・フィロソフ主催のポーランドの亡命ロシア文学サークル活動について詳細を明らかにし学会報告した。これに関連して分担研究者ピョートル・ミツネル氏(ステファン・ヴィシンスキ枢機卿、ワルシャワ)を招聘し、講演会を開催した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

小椋彩, 「トカルチュクの創作の東洋思想」, 『スラヴ年鑑』2016, 3-4 号, 250-266頁, 査読有, 2016 (ロシア語論文)

小椋彩, 「ポーランドのドキュメンタリーにおける移動: 『シベリアのレッスン』と小さな祖国」, 阿部賢一編『東欧文学における東のイメージ: 過去と現在の変わるものと変わらぬもの』スラブ・ユーラシア研究論集第30巻, 77-88頁, 査読無, 2016 (英語論文)

小椋彩, 「新しい紀行文学と余白としての中欧をめぐる(オルガ・トカルチュク講演への解題)」, 阿部賢一編『東欧文学における東のイメージ: 過去と現在の変わるものと変わらぬもの』スラブ・ユーラシア研究論集第30巻, 9-15頁, 査読無, 2016 (英語論文)

小椋彩, 「日本の雑誌」とアレクセイ・レーミゾフのカリカチュア, 『マティツァ・スルプスカ・スラヴ学論集』(マティツァ・スルプスカ, セルビア)第87号, 査読有, 149-162頁, 2015 (ロシア語論文)

〔学会発表〕(計 13 件)

小椋彩, 「ワルシャワの亡命ロシア」, 国際シンポジウム「東欧文学の多言語的トポス: 複数言語使用地域の創作をめぐる求心力と遠心力」, 東京大学本郷キャンパス, 2018

小椋彩, 「「亡命作家」ゴモリツキのアイデンティティをめぐる」, ポーランド独立 100 周年記念国際学会「ポーランド人のアイデンティティをめぐる」, 城西大学東京紀尾井町キャンパス, 2018

小椋彩, 「映画『ポコット』とトカルチュク周辺」, ポーランド映画祭 2018, 東京都写真美術館ホール, 2018

小椋彩, 「日本におけるロシア・モダニズム受容(レーミゾフを例に)」, 北海道スラブ研究会, 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター, 2018

小椋彩, 「ヘテロトピアとしての亡命コミュニティ: レーミゾフの場合」, 国際学会・英国スラヴ東欧学会 (BASEES) 2018 年度年次大会, ケンブリッジ大学フィッツウィリアム・カレッジ, ケンブリッジ (英語), 2018

小椋彩, 「チャプスキとレーミゾフ: 亡命パリ時代の重要な交友関係」, 第 16 回国際スラヴィスト会議 2018, ベオグラード大学, ベオグラード (英語), 2018

小椋彩, 「ポーランドの亡命ロシア文学」, 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター客員研究員セミナー, 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター, 2017

小椋彩, 「レーミゾフの虚実: 晩年の交友関係と創作をめぐる」, 平成 28 年度日本ロシア文学会研究発表会, 北海道大学, 2016

小椋彩, 「戦間期ポーランドの亡命ロシア」, 科学研究費補助金基盤研究 (C)「在外ロシア文化と同時代の世界」2015 年度研究集会, 神戸大学, 2015

小椋彩, 「レーミゾフとオリエンタリズム: 視覚芸術における東洋的スタイルの影響について」, 国際学会「アレクセイ・レーミゾフの遺産と 21 世紀: 研究と出版の実際的問題」, ロシア科学アカデミー・ロシア文学研究所, 亡命ロシア文学研究センター, サンクトペテルブルグ (ロシア語), 2015

小椋彩, 「レーミゾフとチャプスキ: 二人の芸術家の交流」, 国際学会「亡命ロシア文化: 国家, 言語, 分野の越境」, ザーランド大学スラヴ学科, ザールブリュッケン, ドイツ (英語), 2015

小椋彩, 「木村訳で読むポーランド文学の愉しみ」, 木村彰一先生誕 100 年記念・日本スラヴ

学研究会・日本ロシア文学会合同シンポジウム，東京大学，2015

小椋彩，「20世紀芸術作品における19世紀文学：レーミゾフのドロージングとカリグラフィによる古典文学のモダニズム的解釈」，国際中欧・東欧研究協議会第9回世界大会，千葉（英語），2015

〔図書〕（計 1 件）

小椋彩 他，「レーミゾフ」，共著，『赤い鳥事典』編集委員会編，『赤い鳥』事典』，柏書房，2018，290-291

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：ミツネル ピョートル

ローマ字氏名：Mitzner, Piotr

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。